

第10部

特集10 Evidence Based Approach

植原 啓介、大川 恵子、アフマド・フスニ・タムリン、工藤 紀篤、前川 マルコス貞夫、
明石 枝里子、池田 梨花、宮北 剛己、村井 純

第1章 背景

21世紀に入ってインターネットが普及したことにより、社会のグローバル化は加速した。現代社会においては、全ての事象が世界とつながっており、多くの問題は国内など局所的に解決することができなくなっている。また、分野的な広がりも進んでいる。以前は医療の問題であれば医学、まちづくりの分野であれば土木など、特定の専門分野で問題解決を突き詰めていくことが主流であった。しかし、現在我々が抱える問題の多くは、医療と経済に関わる問題、土木と環境とICTに関わる問題など、複数の分野における知見を融合させて問題解決にあたらなければならない。

また、情報通信技術(Information and Communication Technology, ICT)が普及した現在においては様々な活動がデジタル基盤上で行われ、結果として様々な情報がデータとして取得できるようになった。このため、以前はデータに基づく判断をするのが難しかったような場面でも、データを入手することが可能になり、それに基づく判断を下すことが可能となった。このような状況下においては、データの利活用に関するスキルは万人に必須である。そのようなスキルを多くの人が身につけることによって旧態然とした勘・経験・度胸(頭文字をとってKKDと呼ばれる)による間違った決定を避けることができ、科学に基づく判断をすることができるようになる。このことは社会的コストを削減するためにも役立つ。

このような現状に対応するためには、人材育成が不可欠である。20世紀の人材育成の主流は専門家育成であった。しかし、現代の複雑な社会においては1人で解決できる問題は少なく、問題の多くは多数の人々の協力の下で取り

組んでいかなければならない。

そこで、WIDE ProjectのSOI Asiaプロジェクトの参加大学を基礎としたEvidence Based Approach(EBA)コンソーシアムを、慶應義塾大学を中心として文科省の世界展開力の助成を受けて2012年に設立した。EBAでは「Foster the Southeast Asia wide collaborative community among Universities and research institutions for designing evidence-based resilient future society.」をミッションとして掲げ、参加組織が属する国々が抱える問題にエビデンスベースにチームでアプローチすることを可能とする人材の育成に取り組んだ。より具体的には、1)エネルギーと環境、2)健康、3)災害マネジメントを主たる活動領域として定め、基礎コースのデザイン、フィールドワークやインターンシップから成るプラクティカルコースのデザインなどを行い、これまでの1つの大学が1人の学生を育てるモデルから、1人の学生を複数の大学で育てるモデルへの脱皮を図った(図1)。

2012年から始まったEBAコンソーシアムには、最終的に図2から図3に示すように7ヶ国9大学が参加し、約600人の学生の育成をおこない、1000枚以上のサティフィケートを発行した。EBAコンソーシアムは文科省の世界展開

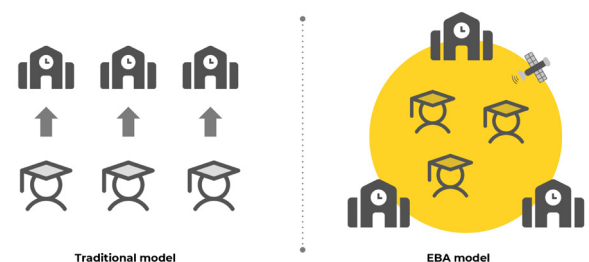


図1 これまでの教育とEBAにおける教育

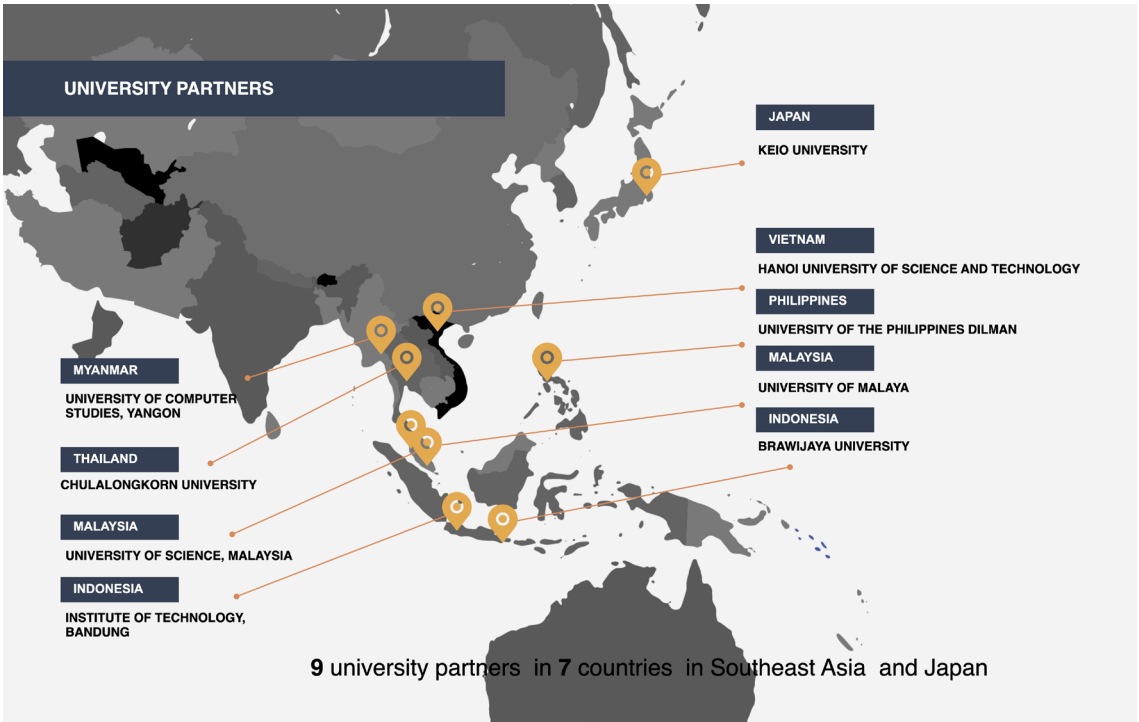


図2 パートナー大学

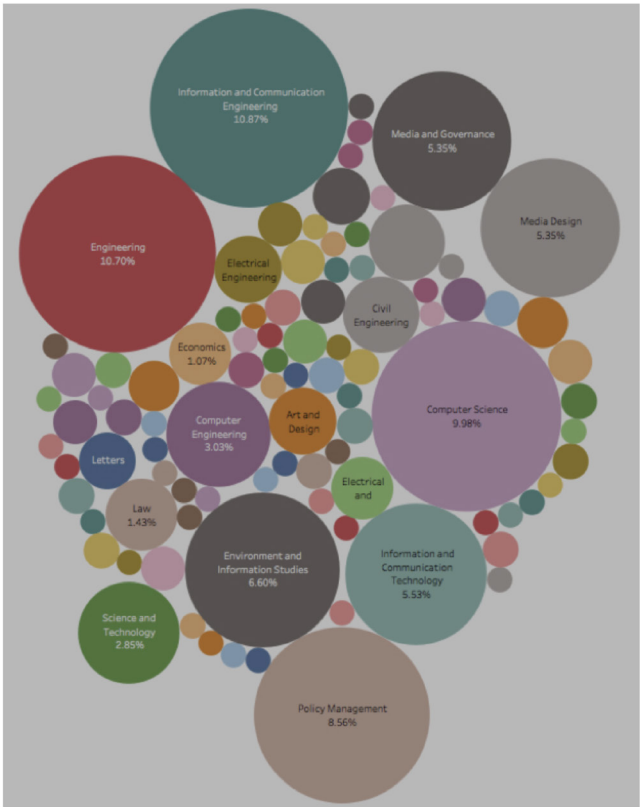
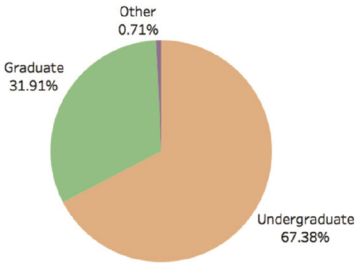
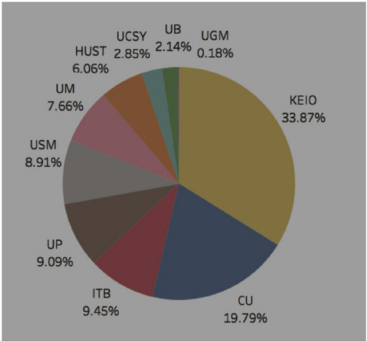


図3 2012年度から2016年度の参加者内訳

力の助成が終わる2016年度まで継続し、助成が終了した後も規模を縮小して今日まで継続してきた。

第2章 EBAプロジェクトのカリキュラム

EBAコンソーシアムでは、参加大学共通のカリキュラムを作成した。EBAコンソーシアムはASEANの多くの国の大学が参加しており、それぞれの国や大学によって異なるルールが存在しており、全ての大学で学生に単位を与えることは現実的ではなかった。そのため、EBAコンソーシアムとしての独自のサティフィケートを導入した。この仕組みの中では、いくつかの科目カテゴリを設定し、そのカテゴリから所定の数のサティフィケートを取得することによって、その科目カテゴリを学修したものとする。全てのカテゴリにおいて所定の数のサティフィケートを取得すると、EBAサティフィケート(学部レベルに対応するEBAベーシックサティフィケート、修士レベルに対応するEBAアドバンスドサティフィケート)を発行することとした。

EBAのコース分類は大きく3つに分かれている。1)

Practical courses、2)Specialized courses、3)EBA core coursesである。

EBA core coursesは、エビデンスベースドな思考を可能とするためのData Science、それぞれの国や地域において活動するために必須となるPolicy and Governance、Social Innovation、そして現代のリテラシの1つであるInformation Technologyから構成される。これらのコースはEBAにおいて基礎と位置づけられているもので、多くの大学において対応する科目がすでに存在する。そのため、それぞれの大学に設置されている科目をそれぞれのコースの中の科目に紐づけて、学生が所属する自分の大学で学ぶことができるようにした。

Specialized Coursesは、3つの分野が設定されている。1)Energy and Environment、2)Life and Health、3)Disaster managementである。これらの3つの分野は、いずれもASEANおよび日本において喫緊の課題と位置付けられるものである。これらのコースはEBAにおける専門教育と位置付けられており、大学院レベルの科目が紐付けられる。学生は、自身が所属する大学に当該科目があればそこでサティフィケートを取得することが可能であ

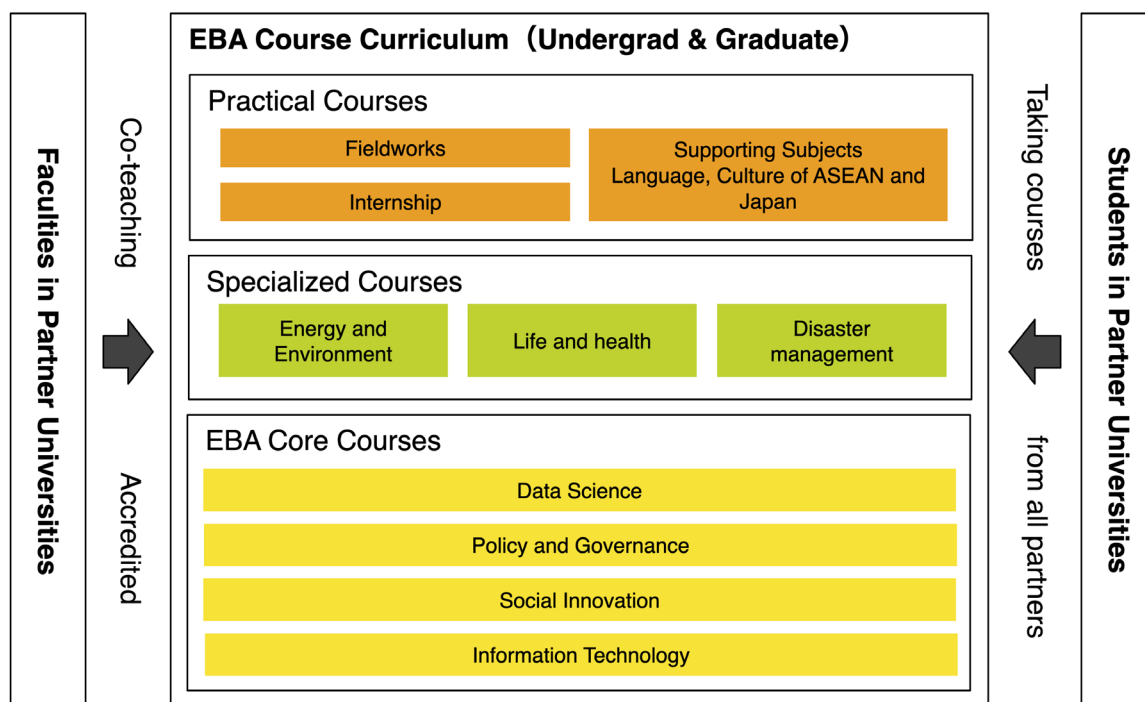


図4 EBAのカリキュラム概要

るし、もし対応する科目がない場合は他大学への留学や遠隔授業などを通してサティフィケートを取得することとなる。

Practical coursesはEBAでは実践と位置付けられるものであり、1)Fieldworks、2)Internship、3)Supporting Subjects Language, Culture of ASEAN and Japanから構成されている。EBAでは実践を重んじており、このコース群において、実際に課題を抱える地域におけるフィールドワークに参加してその問題に取り組んだり、その国の文化や言語に触れたりといった機会を設けている。

EBA全体のカリキュラム概要を図4に示す。

典型的な学生は、初めにEBA core coursesを学ぶことによってEBAの基本スキルを身に着け、フィールドワークに参加して実フィールドにおける基本スキルの使い方を体験すると共に他国の文化や言語に触れて協同の重要性を学ぶ。図5に実際のフィールドワークの様子を示す。その後、Specialized coursesで自分の専門性を確立し、インターンシップなどを通してデータに基づく社会問題を解決できるエキスパートとして育っていく。

第3章 新生EBAプロジェクト

2021年からAPNIC Foundationの寄附を得て、新生EBAプロジェクトが開始されることとなった。コンセプトは以前のEBAコンソーシアムと同様であるが、新しく参加大学を募集し、Specialized coursesも再検討する予定である。

2021年度から新生EBAの活動が始まったが、2020年からのコロナ禍において、現在、フィールドワークを実施したりリアルな学生の交流をしたりすることが難しい状況にある。そこで、フィールドワークを含め、2021年度は全ての活動をオンラインでおこなった。具体的には、2021年8月に開催したEBAの全体ミーティング、バーチャルフィールドワークの準備である。全体ミーティングは遠隔会議システムであるWebexやコラボレーションツールであるPadletを活用した。ミーティングについてはこれらのツールを活用することで問題なく実施することができた。

一方、フィールドワークのオンライン化は挑戦であった。まずは慶應義塾大学SFCの学生3人に対して単位が取得できる正規の授業としてバーチャルフィールドワークのパイロットプログラムを開発した。開始当初のバーチャル



図5 フィールドワークの様子

第4章 まとめ

フィールドワークの構成は図6の通りであった。最初の回「What's FW」では、フィールドワークとは何かについて学ぶ。フィールドワークと観光、Study tourの違いは何かなどの問いに答えられるようになることが目的である。その後「Virtual Study tour」を通して、対象地域の概要を学ぶ。その後、他の学生や教員との間でディスカッションを行い、自分なりのリサーチクエスチョンを作る。ただし、その後に授業提供側が提供できるデータの制限から、いくつかのリサーチクエスチョンの候補を授業提供側が用意しておき、学生がそこから選ぶことを基本とした。各学生がリサーチクエスチョンを立てた後は、コース毎に自分の立てた問に役立つデータを見つけ、それを分析し、自分なりの回答を導き出す。この部分はグループワークあるいは個人作業となる。その後、「What's Storytelling」において自分の主張をどのように他人にプレゼンテーションすると効果的なのかを学び、最後に他の学生や教員の前でプレゼンテーションを行う。

WIDE Projectでは、2012年からEBAコンソーシアムを設立し、データを活用することが出来る国際的な次世代人材の育成に努めてきた。2021年度からは新しい資金を得て、新たなEBAプロジェクトを開始した。現在のコロナ禍において国際的な活動は非常に制限されているが、将来を見据えて同プロジェクトを通して次世代の人材の育成に努めていく予定である。

2021年度のバーチャルフィールドワークは、準備期間の関係で慶應義塾大学の学生のみに提供した。また、2022年3月以降はITBの学生に対して同様のプログラムが提供される予定である。今後は、複数の大学からの参加者を募り、異文化コミュニケーションなどの機会を設けながらバーチャルフィールドワークのあり方を精査していく予定である。

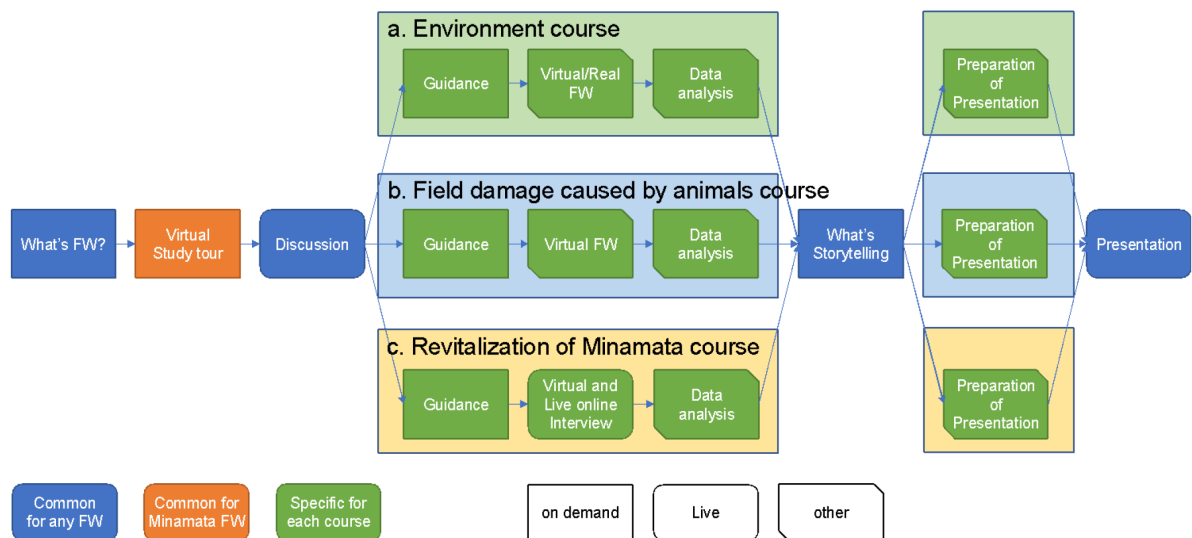


図6 バーチャルフィールドワークの構成